

学術研究における新しい関係性のかたち —「研究者—協力者・当事者」から「共同発信者」へ

赤 阪 麻 由
(立命館大学大学院)

はじめに

本シンポジウムは、若手研究者2人、患者本人、患者家族による発表がなされており、その構成一つをとっても非常に稀有な形態であると言えるだろう。「難病患者の生を伝える」という共通した目的に向かって4人各々の立場からの見解や語りがあり、その立場だから語れること、見えること、伝えられることを通して、幅広い知見を得ることが志向されていた場でもあった。また、それぞれの発表を通覧すると、「研究者」「当事者」という枠を超え、シンプルに「ひととひととの関わり合い」がそこに肅然と存在していることが印象的である。ここでは、研究者という立場から、研究者と当事者が共に発表を行う意義、協力者の位置づけ、研究者と協力者あるいは当事者の関係性に焦点を当ててコメントしたい。

「知らせる」という役割

研究者とは何なのだろうか。もっとも基本的なところでは、研究者は論文を書き、研究成果をあげる、新しい知見を世に発表することを責務としている。ここでは、より根本的な議論として、何のために研究を行うのか、研究者の役割とは何なのだろうかということについて、検討したい。

本シンポジウムで4名の話題提供者が共通して目指そうとしたことは、端的に言えば「生の姿を知ってもらうこと」であったと考えられる。これまでも、難病患者の生を描こうとした研究や、闘病記や講演会での発表を通じて情報発信を行ってきた患者や患者家族は相当数存在している。日高氏は「広

く社会に向けて病について語っていくということは、法制度や社会的な支援システムの構築にもつながる大切なことであり、療養の技法について共有をしていくということも、実際の生活にかかってくる重大事であると考えられる」と述べており、まずは知見を発信していくことが実践につながる第一歩であるという論点がここで提示されている。さらに、学会というアカデミックな場で発表を行ったということが非常に重要なポイントである。なぜならば、発表された新たな知見が研究者たちに共有され、論議されることは、多かれ少なかれそのフィールドに対して影響を及ぼす可能性を秘めているからである。

もともと支援者であったが、思いがけず支援される側になった牛久保氏、患者である父親の自宅での介護体験を語った安田氏の発表は、率直に強いインパクトがあり、生の声を伝える上で、直接当人に語ってもらうことの意義の大きさが示されている。しかし、彼らが語る場、伝えることのできる場は決して豊富にあるわけではなく、誰しものが「語れる」わけではない。また、時に専門家と協力して伝えるという手段の方がより有効であることもある。

研究者は直接的、間接的に実践家であるという側面を持ち合わせており、膨大な経験から産出された貴重な知見がアカデミアの世界で共有されることにより、さらなる発展が期待される。ここで、そのフィールドそのものをよりよいものにする可能性を拓くという、研究者としての本質的な役割が問われることになるだろう。

杉万（2006）は研究対象と研究者による共同の実践を展開し、両者が共同でメッセージを発信する研究スタンスを人間科学と定義し、その立場に立つ研究は程度の差こそあれアクションリサーチ（実践研究）としての性格を有している、としている。今回のシンポジウムではアクションリサーチであると明示してはいないが、そのスタンスは杉万（2006）の定義する人間科学とまさに合致しており、非常に似た志向があると考えられる。ただし、従来のアクションリサーチ、あるいは心理学的な研究と異なる点として、本シンポジウムでは「知らせる」という役割が強調されている。研究上の付き合いのみならず、もっと長い時間的展望で考えた時に、アクションリサーチが目指

すところの「集合体や社会のベターメント」(杉万, 2006)に向かうシステムを作ることが、研究者の仕事であるということが示されている。それを実現するためには、フィールドに通暁し、場の成員についても深く理解しておく必要がある。本シンポジウムでは「ここにいる唯一無二の人」に焦点を当て、という方法が採られている。この点については次項で論じる。

「ここにいる唯一無二の人」に焦点を当てる

心理学、特に自然科学を強調してきた実験系心理学における研究においては、「研究者」は主にデータ収集者であり、研究者とフィールドとの関係は鹿毛(2002)の言葉を借りるならば「匿名的關係」である。そのようなディシプリンの中では、客観性というものが極めて重要視され、協力者はあくまで1データ、1サンプルにすぎない、とされてきた背景がある。しかし、「客観性」を重視するために、人を彼らの生きる文脈でとらえようとする視点が見失われがちであったり、研究対象となる人を研究の単なる手段に貶め、彼らとの関係性がないがしろにされる一方で、これらの研究成果を安易に一般化しようとする点が高い問題視されてきたという事実もある(鹿毛, 2002)。

一方、日高氏や安達氏が採用する「ライフ・エスノグラフィー」という方法論においては、研究者と協力者の関係は上記の対極な位置づけにあり、鹿毛(2002)の言葉を借りるならば「固有名詞的關係」である。日高氏は発表の中で協力者の実名の使用について、「先方の希望でもあり、抽象化あるいは匿名化された「誰か」ではなく、実在している、個人として生きている様子を伝えることを狙いとしている」と言及している。元来心理学の研究において、協力者のプライバシーを守るという倫理的配慮については基本中の基本として教わるものであり、インフォーマントが特定されないようにすることには細心の注意を払うのが当然であった。よって、従来の心理学における研究の中では協力者の実名を使用して発表されているものはほとんど無い。「どこかの誰か」ではなく、「ここにいる唯一無二の人」に焦点を当てて研究を行うという、まさにこれまで心理学者がとってきたスタンスとは正反対の扱

い方であると言えよう。

日高氏や安達氏が提示した「ライフ・エスノグラフィー」は、患者の生の「厚い記述」(Geertz, 1983)を通じ、場の文脈を捨象することなく記述することにより、「実際に場で何が起きているのか」、という実態をよりリアリティをもった形で表現するための試みとして位置づけることが可能である。また、研究者自身が、参与観察者として場に厳然と存在する以上、必然的に、研究者は無色透明な観察者などではなく、場の成員とともに影響し合うなかで研究を遂行していくことになる。こうした動的なプロセスのなかで、研究者—協力者という関係性もまた変わっていかざるを得ない。なぜなら、フィールドにおいて、研究者が「初心者」になったり、場の成員が「熟達者」になったり、といった位相の変化や、フィールドの人たちとの間に「ともに学び合う」関係(鹿毛, 2002)を構築していくということが想定されるからである。本シンポジウムで示唆されていた、研究者—協力者の「新たな」関係性はどのようなものであったのであろうか。この点について、さらに以下にて検討する。

「協力者」から「共同発信者へ」

指定討論者である児島氏の、「これまでせいぜい最後のアクリリジメントにしか登場しなかったインフォーマントを共同執筆者として実名で出す」という提案は非常に興味深い。「研究者」と「発信者」はイコールではない。すなわち基本的に「研究者」は「発信者」であるが、「発信者」は「研究者」である必要は必ずしもないのである。日高氏や安達氏の研究はまさに研究者である両氏と、インフォーマントである患者、家族、ヘルパーの関係性の中で生まれたものであり、研究者とインフォーマントのそれぞれが発信者であると言えるであろう。実際に、この学会のシンポジウムという場で研究者と患者本人、患者家族が肩を並べて発表を行うというのは、「共同執筆者」ならぬ「共同発信者」として登壇者全員を位置づける、最前線の方法をもって生成された試みである。安達氏が行った「マルチボカール・ビジュアル・エスノグラフィー」を用いた研究では、研究者(アウトサイダー)が観察し、

得られた考察に対して、患者やヘルパー（インサイダー）が意見を述べることで、さらに新しい考察が生成されていくという、まさに研究者と協力者による共同作業が行われている様子が語られていた。今後、協力者を「唯一無二の生きた人」として扱うだけでなく、共に発信していくという、従来の「協力者」の枠に収まりきれない役割を担う研究スタイルが重要になっていくのではないだろうか。

一方で、本シンポジウムの話題提供者4人が共通した目的をもった「共同発信者」であるとするならば、「研究者」と「当事者」をはっきり分けることには少々疑問が残る。「当事者」という言葉を辞書的な意味で捉えるならば「その事柄に直接関係している人」であり、病いに関して言えば研究対象となる人（々）、つまり主には患者や患者家族などであると考えられる。しかし、一人の人間として生きている限り、誰しもある側面では「当事者」であり、ある側面では「当事者ではない」という点に留意が必要である。「ある側面で当事者である」とは、もちろんいろいろな意味・水準を内包しうるが、一番基本的なところで言えば、ある研究者がその研究テーマに興味を持っている時点ですでに当事者であると捉えることもできる。研究者の中には、自分自身、家族や友人が同じ問題を抱えていることを研究動機であるとする事例が多々あるが、そのような状況にある研究者はより密接な当事者であると言えるかもしれない。また、「ある側面では当事者ではない」とは、たとえ名称、概念として同じ問題を抱えていたとしても、それぞれの経験や思いはその人だけのものであり、決して「同じ」ではないということを指す。よって、仮に研究者が協力者と同様の経験をしていたとしても、より深く理解できるのではないか、協力者が簡単に体験を話してくれるのではないかと安易に考えるのはあまりに早計すぎる。

重要なのは、研究者は協力者との関係性をいかに構築するかということ、またそれに大きく影響されるフィールドへの関わり方や役割、研究動機やその場にいる自分の感情について自覚的であることである。これには、当然のことながら自分とフィールドの距離を適切に保つこと、また客観的でないという批判を恐れるがあまり自分の持つ「当事者性」を排除しようとしすぎな

いことも含まれる。こうした議論は、「リフレキシビティ (reflexivity)」の問題として質的研究法の基本的前提として位置づけられてもいるが (Flick, Kardorff, and Steinke, 2010)、研究者自身が何者として場に参与しているか、という点は、特に「集合体や社会のベターメント」(杉万, 2006)を志向する研究者において、極めて重要かつ困難な課題ともなりうる点に注意を要するであろう。

おわりに

病いととも生きる人にとっては、病いは日常であり、生活である。牛久保氏は「患者の心理とは簡単に表現できないのが事実であり、その時々状況の流れにより、患者、家族の心も揺れ、変化していくものだ」と言及しているが、毎日、毎分、毎秒を生きる生活の中で様々な心の揺れが起こることは至極当然のことである。「ここにいる唯一無二の人」に焦点を当てて研究を行い、研究者と協力者・当事者が「共同発信者」になって声を届けるということは、その人の尊厳を守ること、さらにはそのフィールドの発展にもつながっていくであろう。

学術研究における新しいかたちとして、研究者と協力者・当事者が共同発信することを実現した本シンポジウムは非常に新鋭的なものである。しかし、このように「ここにいる唯一無二の人」に焦点を当て、関係を構築していきながら、そのフィールドで得られた知見を発表するというやり方には重要な意義がある一方で、課題もある。その一つとして、個別具体的な事例をいかに一般化し、違うフィールドに役立てていくか、ということが挙げられる。この点について、サトウ (2006) は事例記述から何らかのモデルを作っていく必要があり、普遍性があるからではなく転用可能だからこそ、事例報告には他の人に有用な意味が生じる、と述べている。本シンポジウムを学会というアカデミアの場で行ったこと、「共同発信者」が情報を発信したこと、そしてそれをこうして他者が参照できる形にすることは、「モデル」を提示し、さまざまな切り口から異なる文脈への転用可能性を生み出す資源を作ることに他ならない。つまり、本シンポジウムのような試みはそのフィールドをよ

りよいものにしていくという実践的な意味も内包しているとも言えるのである。今後も、さまざまな関係性の中で生成・記述された、フィールドのベターメントにつながっていくような知見のさらなる蓄積が求められる。

【引用文献】

- Flick, U., Kardorff, E. V., and Steinke, I. (2010). What is Qualitative Research? An Introduction to the Field. In Flick, U., Kardorff, E. V., and Steinke, I. (Ed.) , Jenner B. (Tr.) A Companion to Qualitative Research (3rd Ed.). Sage Pub. pp.3-11.
- Geertz, C. (1983). Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology. New York: Basic Books.
- サトウタツヤ (2006). 発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線径路等至性モデル 立命館大学人間科学研究, 12, 65-75.
- 鹿毛雅治 (2002). フィールドに関わる「研究者／私」: 実践心理学の可能性 下山晴彦・子安増生 (編) 心理学の新しいかたち 方法への意識 誠信書房 pp.132-172.
- 杉万俊夫 (2006). 質的方法の先鋭化とアクションリサーチ 心理学評論, 49, 551-561.